石見相聞歌の「妹」の視界

竹本　晃

はじめに

『万葉集』巻第2の131番歌から140番歌には、柿本人麻呂とその妻による相聞歌が収められている。題詞によると、人麻呂が石見からの帰京時のことを詠んだ一群と妻の歌であるとわかる。

ところが、この石見相聞歌群の内容はそう単純ではなく、さまざまな問題を内包している。そのなかで、本稿が主として対象とする問題の一つは、長歌と短歌の三つのセットからなる歌群の捉え方について、いまなお意見が一致していないことで、もう一つは、人麻呂の帰京における、帰路（時間の経過を含む）と景観（地名）との関係がうまく整合しないということである。

これらの問題がいまだ解決されたとは言えないなかで、近年石見国の古代山陰道が提示された。これまでは歌の内容から空間を復元するという本末転倒とも言うべき作業が行われてきたが、古代山陰道が復元されたことにより、本来の研究視角が可能となった。そこで本稿は、従来の歌群の捉え方を検証しつつ、そこに復元された山陰道の復元成果を盛り込むことで、石見相聞歌群の歌と空間との関係を、一つの視点から整合させることを目的とする。

一　石見相聞歌群の構造

石見相聞歌群は以下の通りである。[1]

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首
　　并せて短歌

【①】

石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと〈一に云ふ、「磯なしと」〉　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟は〈一に云ふ、「磯は」〉なくとも　いさなとり　海辺をさして　にきたづの　荒磯の上に　か青く生ふる　玉藻沖つ藻　朝はふる　風こそ寄せめ　夕はふる　波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹を〈一に云ふ、「はしきよし　妹が手本を」〉　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万度　かへり見すれど　いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ　夏草の　思ひしなへて　偲ふらむ　妹が門見む　なびけこの山

（巻第2の131番歌）

反歌二首

石見のや　高角山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか

（巻第2の132番歌）

笹の葉は　み山もさやに　さやげども　我は妹思ふ　別れ来ぬれば

（巻第2の133番歌）

或本の反歌に曰く

石見なる　高角山の　木の間ゆも　我が袖振るを　妹見けむかも

（巻第2の134番歌）

【②】

つのさはふ　石見の海の　言さへく　辛の崎なる　いくりにそ　深海松生ふる　荒磯にそ　玉藻は生ふる　玉藻なす　なびき寝し　児を　深海松の　深めて思へど　さ寝し夜は　いくだもあらず　延ふつたの　別れし来れば　肝向かふ　心を痛み　思ひつつ　かへり見すれど　大船の　渡の山の　もみち葉の　散りのまがひに　妹が袖　さやにも見えず　妻隠る　屋上の〈一に云ふ、「室上山」〉　山の　雲間より　渡らふ月の　惜しけども　隠らひ来れば　天伝ふ　入日さしぬれ　ますらをと　思へる我も　しきたへの　衣の袖は　通りて濡れぬ

（巻第2の135番歌）

反歌二首

青駒が　足掻きを速み　雲居にそ　妹があたりを　過ぎて来にける〈一に云ふ、「あたりは　隠り来にける」〉

（巻第2の136番歌）

秋山に　落つるもみち葉　しましくは　な散りまがひそ　妹があたり見む〈一に云ふ、「散りなまがひそ」〉

（巻第2の137番歌）

【③】

或本の歌一首　并せて短歌

石見の海　津の浦をなみ　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも　いさなとり　海辺をさして　にきたつの　荒磯の上に　か青く生ふる　玉藻沖つ藻　明け来れば　波こそ来寄れ　夕されば　風こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄る　玉藻なす　なびき我が寝し　しきたへの　妹が手本を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万度　かへり見すれど　いや遠に　里離り来ぬ　いや高に　山も越え来ぬ　はしきやし　我が妻の児が　夏草の　思ひしなえて　嘆くらむ　角の里見む　なびけこの山

（巻第2の138番歌）

反歌一首

石見の海　打歌の山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか

右は、歌の体同じといへども、句々相替れり。これに因りて重ねて載せたり。

（巻第2の139番歌）

【④】

柿本朝臣人麻呂が妻依羅娘子、人麻呂と相別るる歌一首

な思ひそと　君は言ふとも　逢はむ時　いつと知りてか　我が恋ひざらむ

（巻第2の140番歌）

石見相聞歌群は、十首からなり、①長歌1首（131番歌）・短歌3首（132・133・134番歌）、②長歌1首（135番歌）・短歌2首（136・137番歌）、③長歌1首（138番歌）・短歌1首（139番歌）、④短歌1首（140番歌）に分けられる。さらに、131・135・136・137番歌には、「一に云ふ」が入り、異伝が存在した。

これまで、右の①と③の長歌の歌句が類似していること、そしていくつかの異伝が存在することなどから、伝誦説や推敲説が提示されてきた。現在では、推敲説が有力である。

推敲説は、伊藤博氏によって提起された。[2] その概要は、歌番号順に人麻呂が帰京する過程を示していると考える従来の説とは反対に、131番歌が最終稿であるとし、また、①の131番歌と②の135番歌とを対応させ、135番歌は、時間も空間も131番歌に内包され、131番歌の途中の段階に相当するとみる。これを伊藤氏は、「求心的構図」と呼んでいる。推敲の流れとしては、右の③↓〔①の131番歌の一云＋134番歌〕ならびに〔②の一云〕↓〔134番歌を除く①〕ならびに②となる。

これに対し、橋本達雄氏は、伊藤氏と同じように①と②の主題の類似性を指摘しつつ、伊藤氏とは異なる見解を提示した。[3] 伊藤氏が、②が①の中に収まると解したのに対し、①と②とが明確な対応関係にあることを指摘したのである。そして①②の違いについて、①は「妹」を中心に発想されたもので、②は「われ」を中心にその折の状態・心情を述べたものだという。

「妹」と「われ」からの観点は、すでに中西進氏によって指摘[4]されているが、橋本説での重要な点は、時点としては同じ位相にあると考えたところである。そこが伊藤説との大きな違いでもある。つまり、京までの帰路において、時間の経過とともに見える景観が詠まれているのではなく、同じ場面を異なる視点で詠んだというのが、橋本説の特徴なのである。橋本氏はこれを「同時・並行の構図」と呼んでいる。

では、なぜこの点が重要であるかというと、これまで時間の経過

とともに歌が流れていると考えられてきたが、歌の解釈についても、そうした時間の流れに連動するような、きわめて制約を受けた解釈になっていたからである。たとえば、131番歌は、132番歌にみえる高角山（見納め山と考えられている）[5]を越えるよりも前の段階に位置づけられ、131番歌の末尾の「いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ　夏草の　思ひしなへて　偲ふらむ　妹が門見む　なびけこの山」について、人麻呂がまだ高角山の上にいるかのような解釈がなされてきた点などである。

歌の配列を旅程の順とせず、地名を意識しないとした伊藤氏に至っても、結果的には、131番歌に内包されるという135番歌の位置を、時間・空間に縛られて挿入している。

しかし、橋本説のように、「いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ」が135番歌の「大船の　渡の山の　もみち葉の　散りのまがひに　妹が袖　さやにも見えず　妻隠る　屋上の山の　雲間より　渡らふ月の　惜しけども　隠らひ来れば　天伝ふ　入日さしぬれ」に対応していると考えれば、高角山との前後関係は考慮しなくてすむ。

多くの論者が、旅程を意識して、歌意をそれに合うように解釈しているのに対し、橋本氏は清水克彦氏の説[6]をうけて、たとえば132番歌については回想して詠んだものと捉えている。[7]よって、橋本説のように、①②の対応関係を考慮すれば、旅程の経過から無理に歌意を合わせる必要はないのである。

ところで、石見相聞歌群の構造把握については、その後もいくつか説が出されている。ここでは二つの説を検討する。まずは、伊藤・橋本説を受けて、「別れ」という語に着目し、①を「別れの拒絶」、②を「別れの受容」と位置づけた塩谷香織氏の説[8]である。

塩谷氏の言うように、たしかに「別れ」という語は、最初の方にはなく、①の133番歌に「別れ来ぬれば」として、はじめてみえる。そして②の135番歌には、「延ふつたの　別れし来れば」とある。この部分は橋本説でいう、131番歌の「露霜の　置きてし来れば」に対応する。つまり、「置き」から「別れ」への変化を重視するわけである。また、同じように神野志隆光氏は、135番歌冒頭の枕詞「つのさはふ」「言さへく」に「隔絶のイメージ」があるとして、「別れ」を強調する。[9]

しかし、135番歌を「別れの受容」というには、もう少し説明が必要ではないだろうか。「延ふつたの　別れし来れば」の後に、「肝向かふ　心を痛み　思ひつつ　かへり見すれど」とあり、131番歌と同じように、何度も振り返って「妹」のいる方を見ているわけである。また続きに、「もみち葉の　散りのまがひに　妹が袖　さやにも見えず」とあるように、少なくとも「妹の袖」を見ようとしていることから、いちがいに「別れの受容」とは言えないのではないか。そもそも「置き」と「別れ」で、それほど差があるのかを

まず証明する必要があるだろう。

また、神野志隆光氏は、妹への希求（131番歌）と別離（135番歌）を主題としていると考え、「隔絶のイメージ」のもう一つの理由として、「寄り寝し妹を」（131番歌）と「なびき寝し児を」（135番歌）のように、「妹」が「児」に意図的に置き換えられていることをあげる。[10]

しかしながら、135番歌では、「妹が袖　さやにも見えず」として「妹」が用いられ、その反歌二首（136・137番歌）にも同じく「妹」が用いられているという事実がある。また逆に、131番歌の推敲であるはずの138番歌にも「我が妻の児が」とある。

この法則から外れる「妹」について、「別離」を支持する品田悦一氏は、例外として処理するのではなく、「妹」の特性を自覚し得た作者が、そこに新たな表現性を与えようとしたと解釈する。[11]

しかし、「妹」に別の意味が加わるのならば、「妹」と「児」の表記を基準にして導いた主題自身を一から問い直さねばならなくなる。そもそも石見相聞歌における「妹」「児」には、解釈のしようによって、妻への「希求」とも「隔絶」とも言い得るものがあり、本来ならそこを丁寧に見極めたうえで、主題を考えるべきであろう。

以上のように、塩谷説や神野志説は、主題が明快であるけれども、いずれも難点があり、また橋本説を十分に批判しきれたわけではなかった。よって、本稿では、石見相聞歌群の構造把握について、橋本説を支持したい。

ただし、橋本説では、歌と地名との関係が明瞭でない。もとより無理に比定する必要もなく、逆に歌から地名比定をするのは避けた方がよい。しかし、ある程度でも、人麻呂の通ったルートがわかっていれば、かくだんに歌の内容が理解できるにちがいない。そこでつぎに、そのルートとも密接にかかわる、近年提示された石見地域の復元古代山陰道を検討する。

二　石見国山陰道の復元に対する批評

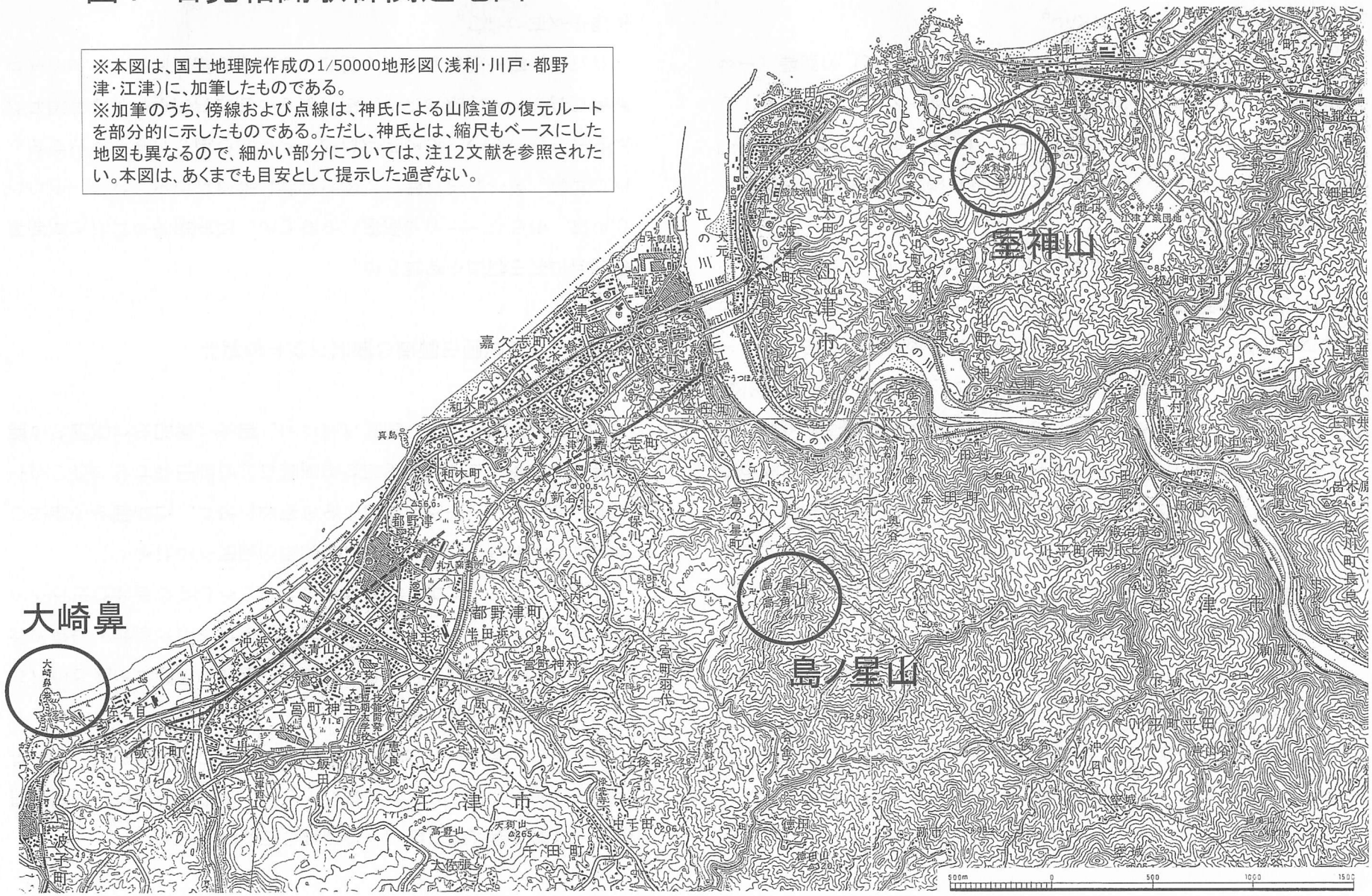
石見相聞歌群の冒頭の題詞によると、柿本人麻呂が石見国から都へ帰る時の歌とある。人麻呂が石見国にいた理由はわからないとすべきであるが、国宰であれ何らかの使者であれ、石見国から帰京のおりに通る道として、ふつうは山陰道を選択するだろう。

歌のなかには、石見の景観をあらわすいくつかの地名が出てくるが、帰京の道である山陰道がわかれば、少なくとも地名・景観と歌との関連が図られる。すなわち、石見相聞歌群の理解を深めるためには、山陰道の復元は欠かせない。

ところが、最近まで石見国内の古代山陰道は、根拠の乏しい曖昧な推定に留まっていたのが現状であった。そのようななか、神英雄氏は、石見相聞歌群に関連する地域の山陰道を復元した。[12]

図1　石見相聞歌群関連地図

※本図は、国土地理院作成の1/50000地形図（浅利・川戸・都野津・江津）に、加筆したものである。
※加筆のうち、傍線および点線は、神氏による山陰道の復元ルートを部分的に示したものである。ただし、神氏とは、縮尺もベースにした地図も異なるので、細かい部分については、注12文献を参照されたい。本図は、あくまでも目安として提示した過ぎない。



神氏が復元した山陰道の範囲は、樟道駅から石見国府を越えたあたりまでの間である。神氏はその間の山陰道について、地形図に残る直線道路痕跡をベースにしながら、部分的に復元していき、線をつないでいった。その流れに沿って、図1を参照しながら、ここでは便宜的に二つに大別して批評を加えたい。

神氏の推定ルート〔前半〕の概略は、中祖遺跡（大田市温泉津町福光）に樟道駅を置き、そこから南へ行った江津市都治町の中都治集落（従来の樟道駅推定地）のあたりで、そのまま南に進まずに西に折れ、まっすぐJR浅利駅付近まで進み、浅利寺のところから山間部を突っ切って、江の川に出るという、まったく新たなルートを提唱した。これにより、樟道駅・江東駅・江西駅の推定地（江の川の両岸）が、従来考えられていたよりも、沿岸部に近くなった。

中祖遺跡については、発掘調査機関の報告では、駅の遺構とは断言せずに、①邇摩郡家の出先機関に伴う倉庫、②樟道駅の駅楼、③樟道駅の雑舎としての倉庫など、いくつかの可能性を考慮しつつ、慎重に述べている。[13] 周辺の発掘区からは、それらしき遺構は出てこなかったので、駅関係の建物かどうか、やや疑問はあるけれども、この遺跡の付近に北の方から山陰道が延びてくることは、一致した見解であるから、積極的に否定するつもりはない。駅間距離から考えても、中都治の集落よりも温泉津町福光の方に分がある。

この樟道駅を越えてから、江の川までのルートが新説で、神説では中都治の集落付近で西に折れる。たしかにJR浅利駅付近まで、直線道路痕跡が残っている。しかし、二箇所ほど等高線が大きく張り出している部分がある。現在の道路は、張り出す丘陵を避けるように敷設されている。そうした部分が、古代において本当に直線道路で結ばれていたと考えてよいのか疑問がないわけではない。切り通しや土砂崩れでもあれば納得いくが、それもなさそうである。

JR浅利駅付近から江の川までのルートについては、近世において「猫坂の道」と呼ばれる旧道にあたるらしく、道が存在したことは認められそうである。ただ、それがどこまで遡るかが問題なのであり、もう少し検討が必要ではないかと思える。

また、そこから江の川の渡河点までの直線ルートは、かなり地形を無視しているので、やはり直線で結ぶのは難しい。ここは山間部なので、地形に沿った道がつくられても不思議ではなく、無理に直線で考える必要はないだろう。

従来は、江の川のもう少し上流が渡河点であると考えられてきた。その一つが江津市松川町太田の「人麿の渡し」の伝承地である。神氏はこれを明治以降に作られた伝承であると指摘した。この点は、江津市渡津町を渡河点とみる神説を補強する大きな材料となる。

その渡津町に長田遺跡があり、神氏は『江津市誌』[14]を引用するかたちで、奈良・平安の須恵器片と土師器片が大量に出土したことや、集落が七世紀頃に小規模な形で成立し、律令期には拡大して大集落

に発展したことを述べ、ここに江東駅があったと推定する。

しかし、『江津市誌』には、長田遺跡の具体的な遺構の説明はない。この地で本格的な発掘調査がなされていないならば、記載事項を鵜呑みにすることはできない。神説を否定はしないが、ここは注意を要する点である。

さて、江の川を越えると、石見国邇摩郡から石見国那賀郡に変わる。神氏の推定ルート〔後半〕の概略は、江の川左岸から都野津を抜けて沿岸部を走り、大崎鼻のあたりを通って波子町を越え、部分的な直線道路痕跡を辿りつつ、浜田市国分町国分の集落に入る。そこからJR山陰本線沿いに進んで古代の伊甘駅あるいは石見国府推定地（浜田市下府町）へとつながる。なお、本稿の対象は、大崎鼻までであるため、あとは省略する。

まず、江の川左岸であるが、神氏は江津市江津町本町に江西駅を推定し、そこから都野津方面へ向かうとみている。この本町からのルートは、近世山陰道[15]に相当するので、それほど問題のないルートである。ただ、近世山陰道が新川で下流の沿岸部に抜けるのに対し、神説はあくまでも直線道路であることを主張し、山間部を突っ切るかたちで、現在の国道九号線に直線で合流させるルートをとる。そして、江津市都野津町から敬川町にかけては、沿岸部を通る。

この沿岸部について、近世山陰道が整備される前までは道などなかったという意見があったようだが、神氏は水尻川の土砂が数メートル以上堆積しているという根拠をもとに退けた。このあたりで古代道路を敷くならば、おそらく沿岸部しかないというのは地形図をみればよくわかる。それを特定したのが神氏の成果であろう。

ただし、嘉久志町から都野津町までの間の山間部に直線道路をつくることは、一見してかなり難しいと考えられる。近世山陰道は、素直に新川を辿って、いったん沿岸部に出て、また都野津で東に戻ってくる。この区間の山間部を直線で辿れそうな痕跡は、今のところ皆無である。近世山陰道と同じとは言わないにしても、それに近い迂回コースをとっても、何ら問題はないと思う。

以上のように、古代山陰道復元については、神英雄説によって、これまで曖昧であった石見地域の山陰道がおおかた復元されたと言える。これは、石見相聞歌を理解するうえで、きわめて重大なことである。神説は、おそらく通説化していくと思われ、今後は、神説をベースにして、人麻呂の石見研究は進められるべきであろう。

しかしながら、同時に留意点もある。神説で言う「道路痕跡」は、発掘調査で道路遺構として確認されたものではない。あくまでも現在の地形図上に残る痕跡に過ぎず、想定のレベルに留まる。また、道路のルートとして、直線を引くのが無理そうな箇所をクリアしなければならない点もある。また今回は省略したが、根拠とされた字名や近世の地名についても、古代から継続して存在したものであるかどうかわからないので、もう少し詰めていくべきであろう。

本稿では、以上の点を留意したうえで、神説を支持したい。各々の部分で修正は必要であるが、おおかたを認めたうえで、つぎにこの山陰道を軸にして、石見相聞歌群との関係を考えたい。

三　石見相聞歌群の視界

第1節　石見相聞歌群にみえる地名

①の131番歌と③の138番歌との関係は、現在では138番歌が初稿で、131番歌が推敲の結果だとみられている。以前は、両歌の内容が近似しているのは、伝誦の過程で生じたものと考えられていた。いずれにしても、この両歌のなかに詠まれている地名は、ほぼ同じところを指すと考えるのが一般的な理解である。

そこで両歌の地名を比較してみると、131番歌の原文に「角乃浦」「妹之門」「和多豆」、138番歌の原文に「津乃浦」「角里」「柔田津」という対応関係がみえる。このうち、前者二つの対応には、それほど違和感はない。「角里」は、『和名抄』の石見国那賀郡都農郷に相当し、現在の江津市の沿岸部にあたる。問題となるのは、三つめの「和多豆」と「柔田津」との対応関係である。

これについては、「和多豆」を「わたづ」と訓むか、「にきたづ」と訓むかで意見が分かれている。古くは仙覚以来「にきたづ」と訓まれていたが、[16]本居宣長によって「わたづ」に変えられ、[17]それ以来論争がある。

現在の考え方を示すなら、まず「にきたづ」説は、ことごとく否定されている。「わたづ」説については、「わたづ」を渡津町渡津にあてる説に対して、歌の順序からすると、人麻呂はまだ「角の里」にいるはずのところが、渡津では「角の里」外になるから、歌意にそぐわなくなるとの批判がある。無理に渡津にあてない説は、右の批判を避けるために、津を渡すという一般的呼称とみている。[18]さらに、「にきたづ」では、『万葉集』における単語の交用表記からして考えがたいとの見方もある。[19]

このように「にきたづ」説は分が悪い。しかし、基礎的な事項に立ち返ってみると、131・138番歌は、歌句が近似していて、推敲の過程で歌句が一部変化したものと考えられている。その順序は、「柔田津」から「和多豆」への変化である。その論理に則って考えるなら、「柔田津（にきたづ）」と詠まれていたのを、「和多豆」に変えたということになる。訓みの部分だけで言うなら、「柔」を「和」に変えただけなのである。

歌句を変える場合に、まったく異なることばに変えるならわかるが、一文字のみの違いで、別の訓みにわざわざ変える意味はあるのだろうか。また、『万葉集』では紛らわしくなるような交用表記はしないというが、単独表記ならまだしも、推敲を前提とするならば、必ずしも紛らわしい表記とは言えないのではないか。「柔」と「和」

は、明らかに同じ訓み「にき」である。それをあえて「和（わ）」に変えたと言うならば、逆にその意味が問われねばならない。ここでいずれかを判断することは困難であるが、「にきたづ」の可能性も大いに残しておくべきではないだろうか。

さてつぎに、②の135番歌冒頭の「つのさはふ　石見の海の言さへく　辛の崎なる」の「辛の崎（辛乃埼）」であるが、現在のところ、江津市波子町の大崎鼻（写真1）にあてるのがもっとも有力である。[20] ほかに浜田市国分町の唐鐘（とうがね）説もあるが、近世史料のなかで「唐鐘」を「からかね」と読んだ事例は、現状では見つからない[21]というから、もはや成立しがたい。唐山（からやま）から延びる崎にあたる大崎鼻を「からさき」と呼んだと推定する澤瀉久孝氏に、今は従うしかない。

さいごに135番歌のなかほどの「妻隠る　屋上の〈一に云ふ、「室上山」〉山の」の「屋上山」と「室上山」について確認する。この「屋上山」「室上山」については、諸説一致して、江津市浅利町の室神山（浅利富士。写真2）にあてている。推敲説においては、「室上山」が推敲の結果、「屋上山」に変えられたという。「室」から「屋」への変化である。これも一文字のみの変化ということからすれば、「柔田津」「和多豆」の例に似ている。

この変化について、説得的なのは、「室上山」の前にある「妻隠る」に着目し、妻がいる場所をよりイメージさせる「屋」を使用したという見方である。[22] しかし、「室」と「屋」の誤認の可能性も捨てがたいのではないだろうか。

「室」「屋」の字の違いは、上に冠する部首のみである。書き間違いもあり得るだろうが、むしろ、誤認の可能性の方が考えられる。それも「屋」から「室」の誤認である。その逆はというと、ウ冠がわからなくなるほどくずれることはないので、「室」を「屋」と誤認する可能性は低いと言える。

一方、尸冠は、くずれるとウ冠に見えることがある。誤認の可能性を模索すると、まず「屋」の第一画目と第二画目は、数字の「2」のようなくずしになる。それに第三画目のはらいがつくと、あたかもウ冠であるかのように見える。この状態では、ウ冠の第三画目の最後のはらいにあたる部分はないが、「至」の第三画目が離れた位置に置かれる場合があり、それがちょうどウ冠の第三画目の最後のはらいに見えてしまうことがある。こうして擬似ウ冠ができあがる。にわかに実例を見つけられないが、一つの可能性として示しておきたい。[23]

いずれにしても、「角の里」から江の川を渡った東北の方向にある室神山（浅利富士）に比定されていることは動かない。

第2節　石見相聞歌群の視界

前章では、山陰道のおおかたのルートを確認し、前節では、ある程度意見の一致をみる地名について確認した。この点をおさえたうえで、石見相聞歌群を捉える橋本達雄説の構造に立ち戻ってみたい。

橋本説は、①の131～133・③の138・139番歌と②の135～137番歌は、旅程の順序とは関係なしに、同じ位相にあると考えた。言い換えると、同じ場面を異なる視点で詠んだという構造である。まずは、便宜的に橋本説の対応関係を表1として示しておきたい。[24]

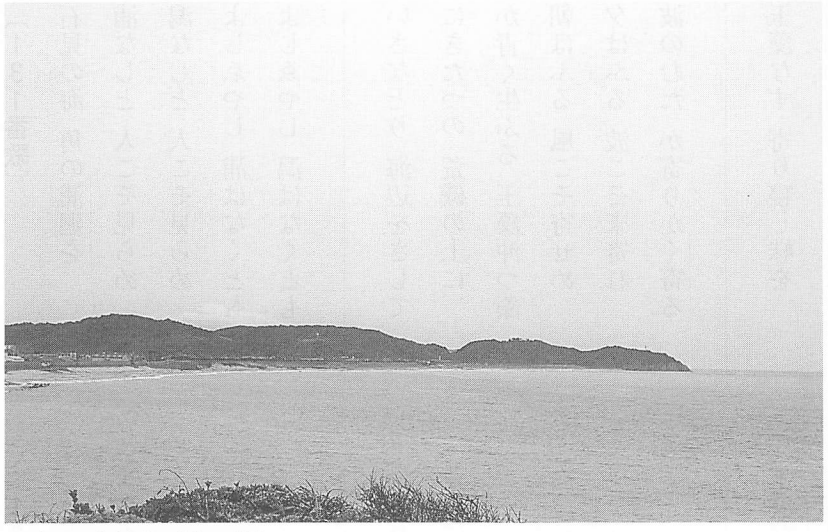


写真1　大崎鼻（辛の崎）

写真2　室神山（屋上の山）

写真3　島ノ星山（高角山）

〔表　1〕

〔131番歌〕

石見の海　角の浦廻を
浦なしと　人こそ見らめ
潟なしと　人こそ見らめ
よしゑやし　浦はなくとも
よしゑやし　潟はなくとも

いさなとり　海辺をさして
にきたづの　荒磯の上に
か青く生ふる　玉藻沖つ藻
朝はふる　風こそ寄せめ
夕はふる　波こそ来寄れ
波のむた　か寄りかく寄る

玉藻なす　寄り寝し妹を
露霜の　置きてし来れば

この道の　八十隈ごとに
万度　かへり見すれど

〔135番歌〕

つのさはふ　石見の海の
言さへく　辛の崎なる

いくりにそ　深海松生ふる
荒磯にそ　玉藻は生ふる

玉藻なす　なびき寝し児を
深海松の　深めて思へど
さ寝し夜は　いくだもあらず
延ふつたの　別れし来れば

肝向かふ　心を痛み
思ひつつ　かへり見すれど

〔131番歌の続き〕

いや遠に　里は離りぬ
いや高に　山も越え来ぬ

夏草の　思ひしなへて
偲ふらむ　妹が門見む
なびけこの山

〔132番歌〕

石見のや高角山の木の間より我
が振る袖を妹見つらむか

〔133番歌〕

笹の葉はみ山もさやにさやげど
も我れは妹思ふ別れ来ぬれば

〔135番歌の続き〕

大船の　渡の山の
もみち葉の　散りのまがひに
妹が袖　さやにも見えず
妻隠る　屋上の山の
雲間より　渡らふ月の
惜しけども　隠らひ来れば
天伝ふ　入日さしぬれ

ますらをと　思へる我も
しきたへの　衣の袖は
通りて濡れぬ

〔136番歌〕

青駒が足掻きを早み雲居にそ妹
があたりを過ぎて来にける

〔137番歌〕

秋山に落つるもみち葉しましく
はな散りまがひそ妹があたり見
む

歌全体をみると、「妹」のいる「角の里」（138番歌）を中心に詠まれていることは明白である。そのなかで、「辛の崎」（135番歌）、「屋上の山」（135番歌）、「高角山」（132番歌）などの比定可能な地名が含まれている。石見相聞歌群を旅程の順に詠まれたものと捉えないにしても、出てくる地名をどう考えるかが、もっとも重要な課題であろう。

従来の見解の多くは、石見国府から「辛の崎」（大崎鼻）を過ぎて、都野津あたりで山側に折れて、「高角山」（島ノ星山。[25] 写真3）を登り、それを越えて、江の川を渡って、「屋上の山」（室神山）を見ながら都へ帰って行ったと考えられていた。

しかし、神英雄氏が説くように、高角山への道は、古代にはなかった可能性が高い。もし獣道程度のものがあったとしても、そもそも高角山へ登るルート、あるいは越えてからのルートをとること自体が、通常では考えにくいことも明白であろう。道路を敷設あるいは通るだけにしても、通りやすい沿岸部の道があるにもかかわらず、あえて急峻で迂遠な山間部を選択する理由が見えてこない。

「角の里」一帯の山陰道が復元された現在では、高角山と山陰道に接点がないことは明らかであり、やはり高角山を通ることはないと考えるのが自然である。では、通ってもいないのに、なぜ「高角山」が歌に詠まれているのかがつぎに問題となる。

132番歌には「高角山の　木の間より　我が振る袖を」とあり、歌のなかでは高角山に登って、「妹」のいる「角の里」を見ながら、人麻呂が袖を振っていることになっている。この状況が事実をどこまで反映したものかが問われるところである。このことは、ほかに地名の入る歌をみたうえで、再度考えてみたい。

つぎに、135番歌の「辛の崎」（大崎鼻）には、「辛の崎なる　いくりにそ　深海松生ふる　荒磯にそ　玉藻は生ふる」とある。山陰道は、たしかに大崎鼻の背後の山のあたりを通るので、歌の内容と状況とが一致するかもしれない。しかし、「辛の崎なるいくり」まで見えるかどうかは別である。またそこに、深海松が生えているのを目視するのも難しいだろう。深海松や玉藻が「なびき寝し児」にかかる序であるにしても、想像をふくらませて詠んだ歌であることに違いはない。また、同じ135番歌の「屋上の山」も序として使われており、帰路の実景であるかどうか疑わしいところである。

このようにみると、帰路の目前の実景とは必ずしも考える必要はないことがわかる。この点は、諸説のなかで、つとに指摘されていたことでもあるが、ここで強調したいのは、「高角山」が詠まれているとしても、正直に「高角山」を越えていったと考える必要はないということである。

また見納め山だから越えなければならないと考える必要もない。というより、「高角山」が見納め山であるかどうかも、山陰道が復元されたことにより、いっそう疑わしくなった。「高角山」を見納

め山とすること自体にも批判がある。[26]「なびけこの山」も、「高角山」に限定せず、通説のように眼前の山々と考えた方がよいだろう。

また、従来の旅程の順で言うと、「高角山」を越えてから「屋上の山」（室神山）を辿ることになるが、山陰道（神説）の位置から考えると、あり得ないコースとなる。このことからも、よりいっそう旅程の順とは言えず、本稿が橋本説を首肯する所以でもある。ただ、橋本説も、旅程の順をあまり意識していないとはいえ、「高角山」の歌（132番歌）を131番歌の「いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ」の部分ないしその直後あたりに配置すると述べられている。

これに対し、本稿では、旅程の順は、まったく考慮する必要はなく、それよりも「妹」へ向けた歌であることがもう少し重視されるべきと考える。当然のことながら、歌の作者は、「われ」（柿本人麻呂）の心情を的確に伝えることを第一としているはずであろう。そのためには、何らかの手段を用いて表現しなければならない。その手段こそが、「われ」の想像する「妹」の視界の導入であったと本稿はみるのである。そのことは、同時に「妹」の立場になるということでもある。

このように考えると、人麻呂は、「妹」の視界を考慮して、石見相聞歌を作った可能性が浮上する。ここで言う「妹」の視界とは、「角の里」および里内の山陰道からの視界である。

右の見方を念頭におき、表1にしたがって歌の概要を述べると、まず歌は「角の里」付近の「石見の海　角の浦廻」の叙述から始まり、具体的な景観の名称として、「妹」の視界に入る「辛の崎」をあげる。そして、「玉藻なす　寄り寝し妹」「玉藻なす　なびき寝し児」を連鎖的に導き、その深く愛する「妹」を置いて別れてきたと述べ、山陰道の帰路の道すがら、「われ」は心を痛めながら「角の里」の方角を何度も振り返る。それからますます「角の里」から離れてしまい、また山々も越えて来てしまい、もう「妹」の振っているであろう袖は見えないくらいまで来たようだという。

その「妹」が見えなくなる様は、「角の里」から「妹」の視界に入る「屋上の山」を見上げた時の情景にたとえて、雲の間を渡っていく明媚な月が隠れていくように惜しいと心情を語る。そして、もう日も沈んでしまったが、おそらく「妹」も大いに偲んでいるだろうし、男らしいはずの「われ」も泣き崩れるだろうと結んでいる。

石見相聞歌群において、見逃してはならないのは、「われ」が「妹」に充てて贈った歌であるから、詠んだ内容（景観）が「妹」に伝わらなければ意味がないという点である。

これまで135番歌は、「角の里」（那賀郡域）から江の川を越えて、隣郡（邇摩郡域）の「屋上の山」（室神山）のあたりのことを詠んでいるように解されてきたが、「妹」の視界に目を向けると、必ずしも人麻呂が見る「屋上の山」付近のことを詠んだ歌と考える

必要はないだろう。「角の里」にいる「妹」が視覚的に捉えられる「屋上の山」（室神山）であればよいのである。

室神山が「角の里」から見えること自体は、周知のことであるが、従来の研究は、作歌した人麻呂の位置にばかり気を取られていた。「辛の崎」（大崎鼻）も同じで、たとえここが「角の里」外であったとしても（「角の里」内とは思うが）、「角の里」あるいは里内の山陰道からはっきりと確かめられる。要するに、「高角山」（132番歌）も含めて、「妹」が見知っている「角の里」あるいは里内の山陰道から見える景観を、「われ」は意図的に詠んだのである。とりわけ131番歌に比べて、135番歌に具体的な地名があがるのは、自己の心情を伝えるとともに、「角の里」にいる「妹」がわかるランドマークでなければならないためであろう。

逆に、石見国府推定地から「角の里」に至るまでの間の地名がまったく出てこないのは、「角の里」からの視界が意識されていることを裏づけている。「角の里」あるいは里内の山陰道からの視界を基準に、歌は組み立てられていたのである。「高角山」が、なにゆえ長歌ではなく短歌であったのかも、図1に明らかなように、「角の里」からきわめて明瞭に見えるとはいえ、おそらく山陰道から大幅に外れていることによると考えるほかない。

おわりに

以上のように、131～133番歌と135～137番歌を同じ位相のなかで、「われ」と「妹」の観点から詠まれたと考える橋本説と、直線道路痕跡を軸に山陰道を復元した神説を批判的に継承することによって、石見相聞歌群に新たな解釈を与えることが可能となった。

従来は、柿本人麻呂の帰路と景観との関係がうまく整合しなかったが、それは「われ」である人麻呂の帰路の足取りを無理に追っていたからである。その後の研究は、その点を整合させるために、宮廷で披露するための推敲というかたちで処理したが、そのような問題ではなかった。

帰路と景観との整合という点で、本稿がもっとも重視したのは、人麻呂が想像する「妹」の視界である。「辛の崎」「屋上の山」「高角山」のうち、明らかに「高角山」は山陰道から外れ、「屋上の山」は「角の里」外に位置する。しかし、「妹」の視界からすれば、それぞれの地名は、「角の里」ならびに里内の山陰道から見えるランドマークとして考えられるのである。したがって、帰路における人麻呂がどこにいようが関係なく、また詠まれている地名の場所に、実際に行く必要もなかったと言える。

このように考えると、石見相聞歌群のうち、人麻呂が詠んだ歌は、やはり意識的に「妹」の視界を盛り込んでいたとみるべきである。むしろ、積極的にそうすることで、「妹」に自己の心情を強く伝えようと試みたのであろう。そして、自己の心情をうまく伝える役割を果たしていたのが、まさにランドマークとしての地名なのであった。

本歌群の検討によって、あらためて歌に詠まれる地名の重要性を認識させられた。今後は、人麻呂のほかの歌群との比較検討が課題である。

[注]

(1) 小島憲之ほか校注・訳『萬葉集①』新編日本古典文学全集6（小学館、一九九四年）による。『万葉集』からの訓読文などの引用は、すべてこれによる。

(2) 伊藤博「石見相聞歌の構造と形成」（『万葉集の歌人と作品 上』塙書房、一九七五年、初出は一九七三年）。伊藤説は以下これによる。

(3) 橋本達雄「石見相聞歌の構造」（『万葉集の作品と歌風』笠間書院、一九九一年、初出は一九七七年）。橋本説は以下これによる。

(4) 中西進「別離」（『柿本人麻呂』日本詩人選2、筑摩書房、一九七〇年）。

(5) 窪田空穂『萬葉集評釋Ⅰ』（『窪田空穂全集 第十三巻』角川書店、一九六六年）など。

(6) 清水克彦『柿本人麻呂—作品研究』（風間書房、一九六五年）。

(7) 134番歌で一般的に捉えられているような、遠い過去の回想ではない。

(8) 塩谷香織「石見相聞歌の構成—別れの拒絶とその受容—」（『五味智英先生追悼 上代文学論叢』笠間書院、一九八四年）。

(9) 神野志隆光「石見相聞歌論」（『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二年）。

(10) 神野志隆光「石見相聞歌」（神野志隆光・坂本信幸編『セミナー 万葉の歌人と作品』第二巻、柿本人麻呂（一）、和泉書院、一九九九年）。

(11) 品田悦一「万葉和歌における呼称の表現性」（『万葉集研究』第十六集、塙書房、一九八八年）。

(12) 神英雄「石見の古代山陰道」（『柿本人麻呂の石見』自照社出版、二〇一〇年）。山陰道復元にかんする神氏の見解は、すべてこれによる。

(13) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編『一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書1 中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』（国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会、二〇〇八年）。出土した中祖遺跡の第Ⅲ区の遺構は、二間×二間の総柱の礎石建物と想定されており、出土遺物から熨斗瓦を使用したものとみられている。出土遺物のなかには、「佐右」（「佐古」と釈読すべきであろう）と書かれた刻書土器もみとめられる。

(14) 江津市誌編纂委員会編『江津市誌』上巻（江津市、一九八二年）。

(15) 島根県教育委員会編『歴史の道調査報告書 山陰道Ⅲ』一九九七年。

(16) 仙覚『萬葉集註釋』巻第二（佐佐木信綱編『仙覚全集』萬葉集叢書第八輯、古今書院、一九二六年の復刻版『萬葉集叢書 全十六冊附索引』臨川書店、一九七二年を参照）。

(17) 本居宣長『萬葉集玉の小琴』（大久保正編『本居宣長全集』第六巻、筑

摩書房、一九七〇年）。

（18）神野志氏前掲注（9）論文。

（19）稲岡耕二『萬葉集全注』巻第二（有斐閣、一九八五年）。ただし、「わたづ」の場所は、不明とする。

（20）澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第二（中央公論社、一九五八年）。

（21）神英雄「石見相聞歌の景観」（『柿本人麻呂の石見』自照社出版、二〇一〇年）。地名にかんする神氏の見解は、すべてこれによる。

（22）たとえば、澤瀉氏前掲注（20）書など。

（23）部分的ならば、出土木簡に事例がある。ウ冠にみえる「屋」は、奈良文化財研究所編『平城京木簡三―二条大路木簡一―』（二〇〇六年）五六七六号木簡。「屋」の旁である「至」の第三画目が離れている事例は、奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査出土木簡概報（二十二）』（一九九〇年）三十八頁下の「淡路国津名郡（中略）物部文屋」がある。文字の画像は、いずれも奈良文化財研究所の木簡画像データベース「木簡字典」で見ることができる。

（24）橋本氏前掲注（3）論文では原文で記されているが、ここでは訓読文に変えた。太字は筆者による。

（25）諸説一致すると考えてよい。

（26）神氏前掲注（21）論文。